

現代ドイツの職業哲学から学ぶ

徳島大学バイオイノベーション研究所 高垣堅太郎

私は東京大学の農学部を卒業したのち日本を飛び出し、アメリカで医学・脳科学を学んで内科研修など行った。その後ドイツにフンボルト招聘研究員として渡り、齧歯類と霊長類（ヒト・サル）の脳研究に10年ほど携わってグループリーダーなどを務めたのち、令和3年には20年ぶりに日本に帰国し、徳島大学のバイオイノベーション研究所で実験ブタを用いた研究に着手した。ブタは寿命が15歳程度で、ヒト用デバイスを用いた長期計測による「ライフスパン脳神経生理学」が可能になる。特に幼獣期の認知発達期の脳神経ネットワーク形成と、老獣期や忘却時における脳神経ネットワークの瓦解の研究を目指している。

コロナ禍かつ2歳の息子を連れ戻りの帰国は、ドイツ・日本双方での行動制限があり、引っ越し荷物の到着にも3ヶ月かかり、身寄りもない四国での新居探しなど、壮絶だった。また、新しい職場は慣れないことばかりで、今までのアメリカやドイツでの研究環境がいかに恵まれたものであったかを身にしみて感じる日々である。

一つには、研究環境そのものの活気と規模が桁違いであった。アメリカでの大学院生時代からドイツ時代も、生理学や脳科学系の研究所や病院に所属して研究していたため、どこも同じ脳科学や脳生理学や医学を専門とする同僚と切磋琢磨して助け合える環境ばかりだった。日本ではとかくテーマが大学内などでも分散しているところが多いことから、研究に関する会話やディベートは、具体的なコンセプトや新しい論文などといった先端研究のレベルではなく、啓蒙書レベルの凡庸な一般論に留まりかねない。

このような研究の規模や環境については、日本の地方大学事情を考えれば如何ともし難いところがある。しかし、日本に20年ぶりに帰国して心底残念に感じるのは、働き方の改革がなかなか進んでいないところである。日本は本来家族や生活を大切にす文化が根強いはずだが、バブル期の変な滅私奉公意識の残骸であろうか、残業のための残業をよしとする風潮や、有給休暇や病欠などをとりにくい風潮、そしてコロナ禍ですらリモートワークをすることをよしとしない風潮が、まだ根強く息づいていると感じる。人生を構成する一要素であるはずの仕事だが、日本社会では逆に人生が仕事に飲み込まれて扼殺されかねないと感じる。

アメリカからドイツに最初に渡った2010年頃、働き方の観点からカルチャーショックを受けたことを、未だに鮮明に覚えている。博士を取得して研究員として初めての就職で、日本やアメリカ東海岸の感覚からか「1年で成果を挙げなければ」と、9月に着任してから年末まで1日も有給休暇を取らず、ゲストハウスと研究室を往復する生活だった。クリスマス前最後の勤務日に、部局の年配の秘書さんがオフィスに来て言った。「ケンタ、あなた有給休暇全く取っていないじゃない。そんな働き方していたら、気が狂うわよ。ちゃんと休暇取りなさい！」「休息をきちんと取っていない人が、いい仕事できるわけないでしょう。」ドイツでの言語・制度・生活の悩みなどを日頃から相談していたこともあったが、その秘書さんの叱責は、人生の先輩としてだけでなく、常識はずれで世間知らずの子供を諭すような口調で、目から鱗であった。

ドイツでの日々を振り返るに、その秘書さんの言葉に、ドイツ人の先進国的な余裕と成熟社会としてのあり方が凝縮されていると思う。研究者としては「休暇を取ることによって仕事の能率やクリエイティビティが向上する」という職業上のメリットも大きい。また法律的な問題もさることながら、有給休暇を取れるときにきちんと取っていないことは逆に職業上も無責任な行為と捉えるドイツ人学者が多いと思う。育児休暇も、私の周りでは夫婦で6ヶ月ずつ分け合って休むパターンが多数だった

し、男性だろうが管理職だろうが育休を取らないことは家族に対するネグレクトと捉えられていたように思う。

もちろん、学者はどこの世でも自己裁量の職人で、ドイツだって簡単にいつでも休めるわけではない。土日や朝晩に考え事や残業を全くしない、という人も、ドイツですら未だかつて数人しか会ったことがない。またドイツ人は一般的に労働者としての権利意識がとても高いことも間違いない。たとえば、「法律と契約で定められた休暇を取ったことによって職務に支障をきたすのであれば、それは、休暇などを加味して十分な人員を充てなかった経営側の落度である」とまで発想するのは、現代日本人には相当高いハードルであろう。ただ、日本も精神文化的な先進国なのだとしたら、大幅に遅れをとっているこの意識については、ドイツの職業哲学を参考にして軌道修正すべきであろう。